

博士論文要旨

論文題名：『厚生労働省の政策過程分析』

さとう みつる
佐藤 満

本書は、6章からなるが、別に「はじめに」と「結語」を置いている。第4章から第6章において、1990年代の厚生労働省の政策を三件取り上げ、それぞれの政策形成過程を追っている。第4章が確定拠出年金法（日本版401K）、第5章が臓器移植法、第6章が介護保険法の成立過程を記述分析する事例研究である。

この三つの政策形成過程を分析するための枠組みが第1章に示す「修正『ゴミ缶』モデル」である。事例研究による記述・分析に入る前に、この三つの政策を扱う厚生労働省がどういう省であるのかについて、政策過程モデル分析を通じて鳥瞰図を得る観点から記しているのが第2章であり、厚生省誕生の歴史的背景を押さえることで、発生史的観点から記しているのが第3章である。

90年代の三つの事例研究を素材に厚生労働省所管の政策過程を分析していくことが目的であるが、特に第1章と第2章は、理論的に整理しておくべき事柄を押さえている。「修正『ゴミ缶』モデル」の検討の前に、政治過程論と政策過程論の関係、特に、政策の語が惹起する「合理的意思決定」の観念と、「過程」という語が連想させる諸勢力の相互作用と帰結に対する不可知論的諦念との関係を整理している。

第2章は、ロウイの研究から政策類型としての「再分配政策」を取り出し、これに示唆を受けた日本人研究者による日本の政策過程モデルを検討して、厚生労働省の政策領域を理論モデルはどうとらえるのかについて記

す。第3章は、1920年代からの厚生省を生んでいく政治・行政の歴史を振り返ることで、どういう人々がどういう政策課題に応えようとして、この新しい政策領域を所掌とする行政機関を作ったのかについて記す。

第4・5・6章はそれぞれの政策形成・実施過程の記述的研究である。政策過程全般という視座から見れば、厚生労働省の所管する政策領域は、広く「再分配」という形で理解されるが、細かく見ていくとさらなる分類が可能であると思われ、政策類型論を用いながらこれを分類していくと、厚労省のみならず、官僚やいわゆるイシュー・ネットワークの知的作業に依拠しがちな現代的政策過程全般を解き明かしていくためのフレームワークの形成を展望できそうである、という方向で、各政策過程の記述・分析は進められる。

結語において、上述の分析枠組みでこれらの事例をどう見ていくのかについて記し、残された課題を展望する。鍵は政策のセイリアンスとイシュー・ネットワークの一体性であろう、ということが暫定的結論である。

「はじめに」において記しているのだが、事例研究を仮説・検証型の研究の素材として用いるのは困難である（選択バイアスやユニークネス問題という処理困難な問題を抱えている）。事例研究はむしろ発見的（理論形成的）研究に適合的な方法論である。暫定的結論として分析のフレームワークを得たところから、これを用いながらの事例の収集とさらなる分析が残された課題である。